

【近刊案内】

甦るヴァニタス——〈はかなさ〉と向き合う現代美術



iStock.com/Ezio Gutzenberg

ドイツと日本、イメージ研究のフロンティア
現代美術のなかに回帰するヴァニタス／

「ヴァニタス」と聞いて、17世紀オランダの静物画を思い浮かべるひとは多いだろう。机上の花やグラスや砂時計などと並んで、髑髏が置かれている、あの独特な絵画である。人生には必ず終末があること、ひとの生命ははかないものであることを、禁欲的な戒めとして告げたものである。ところが、このような宗教的メッセージであったはずの「死とはかなさ」の表現が、信仰の基盤が失われたはずの現代において、アートのなかに——いかにも現代風のモチーフと表現メディアをまといながら——ふたたび甦っているのだ。いったいなぜ今、ヴァニタスなのか。本書は、日本の美術研究グループがドイツの大学と実施した、現代のヴァニタス・アートについての共同研究をまとめたものである。映像・写真・絵画・インスタレーションなど、多彩なジャンルを横断して、欧米やアジアや日本の作家たちが繰り広げるヴァニタス表現の、時間意識や死生観を読み解いていく。

〈書名〉	『甦るヴァニタス 〈はかなさ〉と向き合う現代美術』
〈編者〉	香川檀、ヴィクトリア・フォン・フレミング、結城円
〈発売日〉	2025年11月予定
〈定価〉	5800円（予価）
〈出版元〉	岩波書店

*本書は、2020～2023年度に実施した科研費基盤研究（B）「近現代美術における死生観の研究～「ヴァニタス」表象を中心に」（課題番号：20H01206、研究代表者：香川檀〈現〉武蔵大学名誉教授）の成果である。）

【目次】

序：香川檀　：「はかなさ」と現代の芸術——なぜ今、ヴァニタスなのか

第Ⅰ部　ヨーロッパにおける現代のヴァニタス

- 第1章　ビデオアートにおけるヴァニタス静物画——バロックのモチーフとその時間性について
クラウディア・ベンティーン／ユリア・C・ベルガー（訳：石田圭子）
- 第2章　ジャン・ティンゲリー——ヴァニタス、そしてエフェメラの芸術　ヴィクトリア・フォン・フレミング（訳：香川檀）
- 第3章　生死のはざまのヘテロ・クロニカルな実験——時間管理に対するヴァニタスの反乱　ミーケ・バル（訳：岡添瑠子）
- 第4章　終わりと飛び去り——髑髏、昆虫、そして現代写真におけるヴァニタスのふたつの時間性　カタリーナ・ズコラ（訳：結城円）
- 第5章　サイ・トゥオンブリーのオルフェウス習作群における古代の残存とバロック的時間経験の形象
アンネ・オイスターシュルテ（訳：鈴木賢子）
- 第6章　はかなさの永遠性？——美術館における「エフェメラ」な作品の保存修復について　カロリン・ボールマン（訳：仲間裕子）

第Ⅱ部　現代日本のヴァニタス

- 第7章　現代芸術におけるヴァニタスの回帰——西洋／非西洋、交差するまなざし　ヴィクトリア・フォン・フレミング（訳：香川檀）
- 第8章　杉本博司の死生観とヴァニタスの美学——《ヘンリー八世》をめぐる表象の歴史　仲間裕子
- 第9章　畠山直哉の写真における川の表象——〈無常〉をめぐる一考察　鈴木賢子
- 第10章　写真の間文化的な時間性——荒木経惟『TOMBEAU TOKYO』におけるヴァニタスと無常　結城円
- 第11章　ゴミの化石を作るとき——三島喜美代の作品における物質と時間性　マーレン・ゴツィック
- 第12章　草間彌生とヴァニタス——〈花／女性〉と死をめぐる　石田圭子
- 第13章　「居場所」のはかなさ——イケムラレイコの描く“妣（はは）の国”と死　香川檀

あとがき　結城円

【編者略歴】

香川檀（かがわ まゆみ）　武蔵大学名誉教授、同大学総合研究機構研究員。東京大学大学院総合文化研究科（表象文化論コース）博士後期課程修了。専門は、ドイツの近現代美術 / ジェンダー論 / 記憶論。2011 年から 12 年まで、ベルリン・フンボルト大学客員研究員。著書に『想起のかたち——記憶アートの歴史意識』（水声社、2012 年）、『ハンナ・ヘーヒ——透視のイメージ遊戯』（水声社、2019 年）。論文に「現代美術における〈ヴァニタス〉の回帰——ジャン・ティンゲリの場合」『武蔵大学人文学会雑誌』第 50 巻第 2・3 合併号、2020 年、“Kaiser und Vanitas: Nobuyuki Ōuras Lithographie-Serie «Holding Perspektive»（天皇とヴァニタス——大浦信行の版画連作〈遠近を抱えて〉）”, in : V.von Flemming und J. C. Berger (Hg.), Vanitas als Wiederholung, Berlin:De Gruyter, 2022.

ヴィクトリア・フォン・フレミング (Victoria von Flemming)　ドイツ・ブラウンシュヴァイク美術大学教授。専門は芸術学、中近世美術史、モダン・ポストモダン研究、現代思想(ジェンダーおよびポストコロニアル・スタディ)。2014 年よりハンブルク大学との共同研究「ヴァニタス研究プロジェクト」を主宰。主な編著書に、Alma-Elisa Kittner との共編著 Barock-Moderne-Postmoderne: ungeklärte Beziehungen（バロック・モダン・ポストモダン：未解明の関係）, Wiesbaden, 2014.; Claudia Benthien との共編著 ,Vanitas. Reflexionen über Vergänglichkeit in Literatur, bildende Kunst und theoretischen Diskursen der Gegenwart（ヴァニタス：現代の文学、美術、理論におけるはかなさについての省察）, in 学術雑誌 Paragrana, 第 27 巻 , 2018、ベルリン自由大学歴史人類学学際センター発行、Berlin: De Gruyter. ; Julia C.Berger との共編著, Vanitas als Wiederholung（反復するヴァニタス）, Berlin: DeGruyter, 2022.

結城円（ゆうき まどか）　九州大学准教授。専門は写真史・写真論、イメージ学、比較文化論。2010年ドイツ・デュースブルク＝エッセン大学芸術・デザイン学科写真史・写真論講座にて博士号取得。2011 年から 2013 年まで Alfred Krupp von Bohlen und Halbach 財団「写真専門美術館キュレータープログラム」キュレイトリアル・フェローとして Folkwang Museum 美術館、Museum für Gegenwart Kunst 美術館、ドレスデン国立美術館、Getty Research Institute に勤務。2013 年から 2016 年までデュースブルク＝エッセン大学芸術・芸術学学科講師。著書に、Ich-Fotografie: Kommunikationsformen in Japan seit den 1990er Jahren, Kulturverlag Kadmos 2013。論文に “Vanitas and Ikebana: Transience of Flowers and Photography”, in: The Journal of Asian Arts & Aesthetics, Vol. 9, 2023, “Vanitas in Japan? Kirschblüte in der zeitgenössischen Fotografie（日本のヴァニタス？現代写真における桜）”, in: Victoria von Flemming/ Julia Berger (ed.), Vanitas als Wiederholung, Berlin: DeGruyter 2022.